

二〇二二年一月五日

風の意に添ひて纏るる花すすき
風化して瘦せし羅漢に秋惜しむ
水車舞ひ水草紅葉浮き沈み
時雨るるや湖に漂ふ棄て小舟

たか子
はく子
董雨
宏虎

二〇二二年一月四日

富士山遠く望む松浜新松子
陸軍墓地一基残らず菊の供華
迷ひたる小蟻とともに柚子届く
わが庭の紅葉しをりて出す便り

智恵子
ぼんこ
あひる
みづき

二〇二二年一月三日

ねころるべば窓よぎりゆく翺雲
色変へぬ松橋立の砂嘴一里
おめもじす最古の仏画文化の日
座右とす電子歳時記文化の日
紅葉して九十九折れたる峠道
矢印を進めば薫る菊花展
毬のごとリスの頬つぺや冬支度
ウエーブのごと風に伏す尾花かな
鶏頭の深紅の鶏冠朝日射す

あひる
凡士
はく子
満天
董雨
みきお
智恵子
たか子
やよい

二〇二二年一月二日

蒼天や桜紅葉は穴ばかり
行く秋の九輪の空を鳶の笛
柿をもぐ先ずは背伸びで届くとこ

あひる
凡士
こすもす

気嵐の沖に飛び交ふ汽笛かな
踏み入れば足裏にやさし落葉嵩
木犀の香やあの世まで届かばや
巫女の鈴高く振りたる神の留守

智恵子
千鶴
うつき
なつき

二〇二二年一月一日

微笑仏るます茶の花日和かな
遠山の冬霞せる湖の朝
海峽をまたぐ主塔や小春風
飛びついて来し間歩跡の草虱
牧師館一輪挿しに蓼の花
秋時雨三千院の庭の黙

もとこ
隆松
千鶴
うつき
むべ
宏虎

二〇二二年一月三二日

健啖の卒寿三人秋闌ける

千鶴

二〇二二年一月三〇日

寒き朝もろ手包みに湯吞干す
供花挿せばいづくともなく秋蝶来
羅漢寺へ老には険し磴の秋
病む父に千羽鶴折る夜長かな
銀木犀ひしめき咲きて香りけり

みきお
うつき
はく子
なつき
あひる

毎日句会みのる選・二〇二二年一月七日